

67
2
35

律屋集

物集高世著

上

每家迎春

くさ春もくさくさ宿こささからちんはく人びりさは

明治五年太陰曆改發一太陽曆とちちむとせくま

むて同年十二月三日改明治六年一月一日と定めしこと

大君八神ふりてせもみゆたさる冬たりとけり迎春ふふり

大分縣下西寒多神社の宮司さる時一月一日

社頭ふさくもてちつしものかりりたげん

おほれものさむの社年ふらさる六神代たさるちんは

あつ年の正月元日外永陣正倉成直幸川上橋本等を

もめり娘し金子の人々ちんはさる酒のみあそ

もくさふりさる出さる

おほれものさむの社年ふらさる六神代たさるちんは

明治七年の御會始ふ迎春言志といふ御殿始

ちんはさる奉りてさる八宣教使よめり

ふ今八つさる返りあせり國ふりてさる思ひ

大君のえりのつらむかからえさるいふさるのふさる

あつ同年の御會始ふ都鄙迎春といふ御殿始

おほれものさむの社年ふらさる六神代たさるちんは

年たりてさるの歌

新し年のむらさきの時とけりさるちんは

こころおもしろくわらふ趣向たせまことのこころいふはらふ
いそいでせむしあはれ「心」は似つともいふは似つともいふは
ら今年もまた同題にてまことのこころをかせらつたといふ
やしくあつたともつたせむしあはれ春をいふおもしろく
明治七年の會始より今も若菜のせくねの
もよくねのこころいふは思ふ

春日野ちやぶの野へおむつおむつおむつとて若菜ついでん
又あるから若菜の歌もむ事も年久くあつ今年
はこのせくの發せむしあはれおむつとて熱もいふく老ぬ
まは我もつともいふは思ふ

かきつ野の野のちやぶの野へおむつとて若菜はむね
歌をいふは思ふ

野つねの梅ちやぶの野へおむつとて若菜と人よみあつた
かきつ野のちやぶの野へおむつとて草もむねのちやぶの
若菜ナ

てんち野のちやぶの野へおむつとて若菜と人よみあつた
野若菜
かきつ野のちやぶの野へおむつとて若菜と人よみあつた
沢若菜

山さとの水乃ちやぶの野へおむつとて若菜と人よみあつた

社頭若菜

山のふもと野乃りぬる花をば人にたのむも 神やまをたぬ
かき置し野ふ姫さうまは菜のこころをばかき置し
るるるるる

老ぬまにむ人もれし春の野のこころぬすむる人もむすまふる
題はぬめき

若菜つむ小回のちや道雪やまをくく見ふれりぬる春の水にぬ
やれも子らくふも出てつむせの河のたなを回の原よなる風をく

賭弓

大君乃ちうれがすまのちりき弓もくもかきぬれ先し一羽をり
もくぬの庭のこころゆみもたれくよえん人さすかきぬれをばはく

白馬節會

君つ代乃ちむさしれくぬのためしむいむつし駒もくまかきむ
霞

よー望山花よりやぬのそよの色塔乃つあほをばかきぬれも
くまらばこの峰乃ちまきみハヤ山なる松もかきぬれぬれぬれ

山霞

野霞

くくむまのまもくちの小野の朝霞なる音のこころぬれぬれぬれ

も為人のまうけつむ野のまうけつむ神まうけつむ能まうけつむたふまうけつむ

江霞

みろ江の玉江の春のまうけつむたふ水のまうけつむたふかまうけつむむねまうけつむ

孤嶋霞

春霞まうけつむへつろつろんまうけつむたふ浦やまうけつむたふまうけつむたふたふ小嶋を

松上霞

まうけつむこの松まうけつむたふむくまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふ春霞のけ

題まうけつむたふ

まうけつむまの都へいぬまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふ

初聞鶯

年まうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふ春の春ハたふまうけつむ

鶯乃まうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふ

まうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふ

鶯

鶯の飛くまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふ

つら宿ふまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふ

まうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふ

典客聞鶯

まうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふまうけつむたふ

曉鶯

くさ竹乃ちや子のうまハくまをばと夜を宿るものなり
竹裏鶯

はえくす竹のあはじふうきつたをちとけをちたうくまのち
谷鶯

おちし後くちるもく形うくまのちくく谷のちをうけ
河鶯

くまの初音もえ河を初るもを葉のちの水もあつて
里鶯

まつての里かたむらさきのちうらむらさきもあつて
閑居鶯

わろ宿ハやあはれハあまよるもあつていもくといふ
山里あまのちの時

はをたせるもあまの下菴もあつてあまのちうらむらさき
餘寒

あまのちの春のちうらむらさきもあつていもくといふ
餘寒霞

あまのちのちうらむらさきの外ふくちむらさきもあつて
餘寒池

はえくすもあつて池のちうらむらさきもあつて
題もあつて

くまひびのぬくぬくあつた人こそ春のさかぬ春のさかぬ哉
はえくさの春のさかぬあつたやう長くあつた日のおぼえは

山残雪

ささくささくささくささくささくささくささくささくささく

田残雪

春のさかぬささくささくささくささくささくささくささく

谷残雪

たか山にささくささくささくささくささくささくささく

山春雪

やま國乃山に雪をささくささくささくささくささくささく

題

くさくさ火のささくささくささくささくささくささくささく

梅初開

わさくさくささくささくささくささくささくささくささく

梅

ささくささくささくささくささくささくささくささくささく
枝をささくささくささくささくささくささくささくささく
宮人の社つとささくささくささくささくささくささくささく

梅薰風

梅の香のささくささくささくささくささくささくささく

かゝる垣乃原より男女を待ちてありし所あり梅
さくらやう

かゝる垣乃原より男女を待ちてありし所あり梅
折梅

くさの花枝をよみおまへへうとむはひむとくくとくも花枝をよ
人の家の梅をよみおまへへうとむはひむとくくとくも花枝をよ

も花枝をよみおまへへうとむはひむとくくとくも花枝をよ

月前梅

さるの夜のおぼろ月夜に門をひらき人かきをり梅の香をよみ

竹裏梅

くさ竹乃原より男女を待ちてありし所あり梅

落梅

阿ふらふらふはむくくくさの花香のつたぬまはらふあやうしん

梅花落衣

雲とえんてくちたてくははるくめ花をくくも袖も白ひたる哉

柳

さる門の冬より柳をよみおまへへうとむはひむとくくとくも花枝をよ
春風よみおまへへうとむはひむとくくとくも花枝をよ
く風のをよみおまへへうとむはひむとくくとくも花枝をよ

雨中柳

わが宿のうらみのやまをたへて人すまひはらむとてささげし

河辺柳

六田河をゆく水のゆるぎなきはつるやまをたへてささげし
さほ河をたへてのあふむも春をよむ柳をささげし

題をよみえり

あなやれのかさかへくさかたうてささげし佐保のささげし

春月

世の中は花のふほむのおほくふかきふかき春夜の月
その夜のおほく月夜いつのまふかきふかき春夜の月

春月催興

その夜のおほく月夜いつのまふかきふかき春夜の月

春月入蕉

おほく月夜いつのまふかきふかき春夜の月

山春月

おほく月夜いつのまふかきふかき春夜の月

河春月

春夜のおほく月夜いつのまふかきふかき春夜の月

磯春月

あな津のふかき湯あふかきふかき春夜の月

春雨

乃とくぬる春の海つらとく船とくさきもゆりぬさるるを

東京より有りたるも春人事といふ題よそ人のよき

うらよあるちのころのほろあふく諸門警固の在士と

みよ銃炮をとりて終日門の両側ふとくうき

あゝむたの山はくさ田の御門守とありて春日よとくつら

待花

みよ野のおくかき先ともかきあとも折さるやらぬ山とく哉

高砂の塔のる乃とくうらうらとくみ今もさくへたぐたのほ

さたぬへたぐたとくえゆとくはくさ花今もさくへたぐたのほ

題よめ先

おほくこの先かるとええさる塔花の枝も冬さくも

花さるぬ今のはむもよ春風のふくむかたうをふせて

尋花

あゝむたの山とくさ花とくさるぬをのみにもえよたつ哉

山とくさるぬをのみにもえよたつ哉

遠尋花

ゆき道の道はくほくもさくはさきふさく花のさく所あり

深山尋花

山ふくくさるぬをのみにもえよたつ哉

題よめ先

たつるえぬ君の爲にわびてくさくさふかひくさく

もろろ恥る道うきしれてもろろ宿ふあれたきくもろろ花よハあぬ

挿花

はくろ花うきく奴とハくさぬろおほいぬ人のさうろく

花をたぐる家おろろくやれた酒のあそび所ろく

もろろ宿の花おあきとまろろく君うきあそびはくろ

花のよやくわろろく女よまろろ酒のみ

人乃世のむと花もろろくあそびおあそびはくろ

花下幽思

まろろくやと世のくた時ハ思ハまろろくあそびはくろ

花留人

花をえてまろろくのゆくあやうたハあそびの末乃まろろく

花交松

山ろろくやれた松おろろくまろろくあそびはくろ

風前花

風おのろろくせてえぬあそび花はあそびはくろ

月前花

もろろ夜のあほら月夜おもろろくあそびはくろ

山花

松もろろくあそびはくろこの峰ハ花をたぐる

さうしてのそ方山さうしてそ方人の場のさうしてあともえつ

檜原乃山よ花よ花よ花よ

春さぬやうな山さうして山さうして山さうして山さうして

山の花よよ花よ花よ

はくろ花さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
ちぬかふさうしてさうして山さうして花よ花よ花よ花よ花よ
かゝるさうして道さうして

はくろ花さうしてさうして我さうして来さうして道さうしてさうして

さうして佐神宮さうしてさうして山の花さうしてさうして昨年

の春さうしてさうしてさうしてさうしてさうして梢のさうして今

さうしてさうしてさうして

はくろ花さうしてさうして思ふ花さうして山さうしてさうして花のさうして

花満山

はくろ花さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして野の山

連山花

あさうの八重山さうしてさうしてさうして花のさうしてさうしてさうして

霞巖山花

さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして

嶋花

さうして海さうしてさうして嶋さうしてさうしてさうしてさうして

萱

この野乃志ののきみきくくく妹うつらんあまのえつ

寺あふくくく人筆をつむ所くも画

ゆの寺のみえくふさくの花をみきつてえくくかか佛をけ

蝶

香塔あてはかめめ方は大方の花のありく蝶を志くく

かきまよ女の童蝶のとふ蝶くく所あり

この園乃花おとくく花あるよ花おまらけくく彼のく人お

るく野お霞くくく蝶くく所

くまらむく霞のくくくく蝶く野へのもろたよくくかか

山家巖

山家の巖の静かなる山家く今く人かかあしき集

躑躅

あきそれくく山家のかおおもれくあまらくくくく

苗代

小山田乃里のそと人かそくくあきくく春くくく

あきそれくく水くくく苗代乃くくく

田あきく水乃くくくくくくくくくく

山吹

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

山吹多くやある所は河をさぐりてふとよきはちり山ふたのいふ

山ふたの花をさぐりてせむらむ河乃春は今こそはちり也をさぐり
山吹映水

ふと井ふあつてふとふと山ふたの影をみまう移りり
雨中山吹

雨ふとめつてふとふとの影をみまう移りり山ふたの花
題をなせり

山ふたの花をさぐりて宿かえ志す人も山ふたのいふに
蛙

やふと花のつらうてふとふと水あつてふとふと
故郷蛙

ふと里乃つた垣根のふとふとむむむむ蛙あかたう
藤

春さるん花の影をさぐりてふとふとふとふと
山松乃をさぐりてふとふとふとふと

やふとふとせむらむ花のつらうてふとふと
今市とりて所をさぐりて藤乃あつてふとふと

いぬの年の冬も花をさぐりてふとふと春も花の盛れふと
花をさぐりてふとふと事ありてふとふと

よきくゝの思ふ

かきおれーちたを路くいのちのちたしちたええち波の花

雨後藤

春雨のさゝののちつふはよよまよのちたのちた

致さかえ

夏をさかえさかえちたを公ちたのちたのちた春を久し

惜春

くちをて日かちたさかえちたをさかえちたをさかえ

暮春

くちをてさかえちたをさかえちたをさかえちたをさかえ

花ふらふらーかき世の中ちたをさかえちたをさかえ

暮春遠情

春をさかえちたをさかえちたをさかえちたをさかえ

暮春風

花ちちたの花をさかえちたをさかえちたをさかえ

暮春河

かきちたく神ちたのちたをさかえちたをさかえ

杜首夏

やれを木の杜の青葉をかみようとやれをてつる夏はたよけり

更衣

花衣ぬのハをいもん下ふ着てくる魚よ我ハ志このを致せむ
夏くまハ花の衣ぬをいもたるともいもむにむら春のくまよ

題とくまをこ

夏山のおえりくま花おくくまをくまをくまをくまをくまをくまを

餘花

夏山よささる櫻ハ若葉をささ柴のささるふちうささる

山新樹

夏のたて若葉をささる野の青根う嶽をささる

社頭新樹

神五つ頃おまうさう片岡乃ささるの若葉のたてささる

夜卯花

くま宿のくま花月夜袖ふささる影うささる

谷卯花

くま谷のくま水おまうの花乃影いささる

河卯花

くまの花のくま岸つらむいささる来つと玉河乃里

山家卯花

山里のこの花月夜ほとぎに花はよもぎゆへに入そ来あをほ

題とて夕光を

郭公あつちつちをせぬものを今いともちと垣のうら花

賀茂祭

氏人乃のこくと歌もく千早振賀茂乃御祭はのこく
ちのちと神やもくも葵草乃のみふふかをさる物を

葵

おもひ出る時とてあめあつち草春より後も二葉あつち

新竹

年毎ふめつりぬ哉若竹のかをさるふふふふふふふふふ

千歳るんあつちをさる若竹のおもひとつちをやくもあるか

も宿の窓の若竹若葉と今朝もあつちてもももあつち哉

ちやく宣教使はあつちて参りはるか頃とての

まはとて今この世の事ともかゝるもつちて同

僚内藤存守り新竹の歌をいひまは

夏もあつち若竹めつりあつちてあつちのむせあつち

雨中新竹

はつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

待郭公

片岡のあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

郭公五月の五月といつても人のまゝに時とあるの如く
讃岐國の松山といふ所よりある二の歌よりある
ちよと時をねて題を得る

郭公五月の五月といつても人のまゝに時とあるの如く
深夜待郭公

物おもふと秋もきぬぬも小夜更なるもめもあつ郭公の如
社頭待郭公

神山の山原と云はば社を事もあつはあは初音なるや
尋郭公

郭公五月の五月といつても人のまゝに時とあるの如く
題をねて

おととたはしとて事か若倉乃山のおととたはしとて
いぬつとつとと尋ねしはしとてきぬぬも小夜更なるも
尋聞郭公

あしとたの山原と云はば社を事もあつはあは初音なるや
卯月郭公

郭公五月の五月といつても人のまゝに時とあるの如く
郭公

卯月の五月といつても人のまゝに時とあるの如く
鳴也

郭公催感

郭公人血をたれくまぬわりのをくまひつねのたれくまぬわりの

郭公一聲

ほろろを一聲たれくまぬわりのをくまひつねのたれくまぬわりの

闇夜郭公

あやみぬくをこもるもあやみぬく郭公思を音もくは夕やの空

やみぬくをこもるもあやみぬく郭公あやみぬく月あやみぬく哉

深夜郭公

ふのた夜の枕乃くまぬわりのをくまひつねのたれくまぬわりの

月前郭公

大空のそとをたれくまぬわりのをくまひつねのたれくまぬわりの

あやみぬくをこもるもあやみぬく郭公思を音もくは夕やの空

郭公あやみぬくをこもるもあやみぬく郭公思を音もくは夕やの空

曉郭公

ほろろをこもるもあやみぬく郭公思を音もくは夕やの空

郭公あやみぬくをこもるもあやみぬく郭公思を音もくは夕やの空

題をわたり

あやみぬくをこもるもあやみぬく郭公思を音もくは夕やの空

雨中郭公

五月雨のあやみぬくをこもるもあやみぬく郭公思を音もくは夕やの空

樹上郭公

郭公たるは枝乃ち木のまき八折をふさぐもつらうとて

卯花咲もる岡のほらうりお人むらう郭公ふく新

くの花をふはれ物さうとて郭公ふくあつらうおひきぬひつらさ

里郭公

旅さう宿まのまへー郭公つとつと里おまをさうあつらう

ほさうたをぬいひ山まをさうはけり里ままでさう頃まをさ

渡郭公

山つ後のうはれさうさうのやおひける船をさう新あつら

関郭公

はさうはれ名のをよるさうさうの関の関守おとさかほ

社頭郭公

神山おさう祭とさうさう郭公をえり外の尋ひさう哉

神社おさうさうさう人あつ郭公おさう所

郭公おさうをさうめさう新おとさう神もたさうおさう思

古寺郭公

は。おひさう山寺お宿るさう夜も法をさうおさう哉

山家郭公

さう山おさうさうのまをさうさう人ほさうさうさうさ

我山のまのまをさうさう一おさうたさう新さう都へおさう出さう

夏草

ふみまきらん人かきぬらる宿の庭乃夏草よやま

荒砌夏草

ふる里乃庭のよつとくあそびまじつ世まじりかきまじり

杜夏草

大荒木のもろり下草まじりとは夏ともかく二葉まじり

題さめめき

夏の野乃まきまじりまきまじりまきまじり外まきまじり

瞿麥

かたきまきまじりまきまじりまきまじり夏草乃まきまじりの中まきまじり花

水鶏

夏河乃みくまかきまのくまきまきまきまきまき水鶏まき也

暁水鶏

まきまき故まきまきまきまきまきまきまきまきまき

夕水鶏

まきまきまきのおほつりまきまき水鶏まきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

田家水鶏

まつの夜よ竹田乃里まきまき時まきまきまきまきまき

閑居水鶏

こころあふくはなつかりのよもひくみまなく水鶏のさうらなむかひ哉

夏月

夏夜の空ハせましくやまのこゝろにさかすか月のかげに

井夏月

あきら井の水よやとまき夏夜の月よみこころ影をいそげ

蚊遣火

武蔵よまのま塚の村おとすもくをまの蚊遣がさうらむかひ

山のけう蚊火くく宿のともさよひのこゝろにさかすか

閑居蚊遣火

かきとくあふまのつらふさくさうらつらつたのこゝろにさかすか火

鶴河

く河さうらつらつらまきとハ山にたがさ治の里人あつよもむかひ

ぬそ玉のくくれ夜河と思むくあつよもむかひ火の影

まじもよもむかひ河にさかすか罪のこゝろにさかすか

照射

五月山ののこゝろにさかすかまきとハ山の罪のこゝろにさかすか

まはれ山の影のまきとハ高きとハ高きとハ火串の

虫

あつよもむかひ山にさかすかまきとハ山の影のまきとハ

あつよもむかひ山にさかすかまきとハ山の影のまきとハ

柴津山のなみちをたづねてはたしむるのさびしき山にのぼりてはたしむるの歌

思ふ事ありては秋蟬のからびしを

世の中終りのなみちの昔はなほも魂のまのめをたづねてはたしむるの歌

六月をうら中山道敷原駅をききしを

せしむる歌やいらねん夏ふくの心をうらむるやふさむるの里

やう洗馬駅を夜ふく出てゆきし道まで

ふさ月のまのめをたづねてはたしむるの秋をくたせしむるの歌

豊後國々東郡岐部の浦をたづねてはたしむるの歌

重敏うもやうらぬ嶋中の名をたづねてはたしむるの歌

中ふ南浦を

まじやうなみちの浦に夏の日をたづねてはたしむるの歌

夏嶋

やう國のなみちのなみち嶋夏をたづねてはたしむるの歌

題はなみち

ふさ月のまのめをたづねてはたしむるの歌

たづねてはたしむるの歌

泉

やうたづねてはたしむるの風をたづねてはたしむるの歌

泉

まじやう山谷のなみちの水をたづねてはたしむるの歌

秋もたつてもいふに夏もついでに秋もついでに

晩夏郭公

みま月のあつちをこらり郭公のあはれはいつと

氷室の山お人ちきりあつち

世の中は夏のあつちを秋のあつちをいつと

やまのよふあつちの時

あはれものあつちの下巻世をねまて人のあつちを涼

水ま月のあつちをいつとあつちをいつと

夜納涼

あつちをいつとあつちをいつとあつちをいつと

暁納涼

みま月のあつちをいつとあつちをいつと

河納涼

みま月乃河原のあつちをいつとあつちをいつと

六月あつち中山道柏原駅をきくと

あつちをいつとあつちをいつとあつちをいつと

六月夜

みま月をいつとあつちをいつとあつちをいつと

みま月河原のあつちをいつとあつちをいつと

大夜ふ出くあつちをいつとあつちをいつと

阿波の小野乃秋風をたもててはるまじき人なむとてはるまじき

七夕

今こそあまのなまをたもててはるまじき人なむとてはるまじき
人なむとてはるまじき人なむとてはるまじき

乞巧奠

あまのなまをたもててはるまじき人なむとてはるまじき

七夕は遊女の祭りかた

うつくしき人なむとてはるまじき人なむとてはるまじき

七夕契

一年お一夜のみとてはるまじき人なむとてはるまじき

七夕雨

ほろもとの秋をたもててはるまじき人なむとてはるまじき

七夕河

あまの河をたもててはるまじき人なむとてはるまじき

残暑

夏をたもててはるまじき人なむとてはるまじき

萩

うつくしき宿のかたは乃萩を秋風乃ふうぬとてはるまじき人なむとてはるまじき
我身は乃萩を秋風乃ふうぬとてはるまじき人なむとてはるまじき
ふく風の音とてはるまじき人なむとてはるまじき

題のまゝ

秋風の音のこゝろに
秋の音のこゝろに

秋風はふくむ秋の音のこゝろに
秋の音のこゝろに

秋露滋

秋露は花のこゝろに
秋の音のこゝろに

野萩

野萩の花のこゝろに
秋の音のこゝろに

秋の音のこゝろに
秋の音のこゝろに

薄

薄の音のこゝろに
秋の音のこゝろに

薄露

薄露の音のこゝろに
秋の音のこゝろに

薄似袖

薄似袖の音のこゝろに
秋の音のこゝろに

ちか風のふらふらと我宿りてよき世をたぐひてかほち

沢畔薄

山沢のみたそよ風のふはそよのこころよき世をたぐひて

露

ほよ出てあもむ野つゝのむきもたむつゝの風もきこ

女郎花

あふれ下今いづくにそよこころ各々もつゝのむきも

世の中あつこの大野をそよこころ各々もつゝ人もあつ

芥萱

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

藤袴

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

朝貞

わら宿あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

荒砌朝貞

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

露

おぼろのたのむに夜はつゆとなくたのむの末をまわして妻を思ふ
こころやおおね一昔のこころ虫やよまへたあつめ何きと

鳴

あつちうとつちうせのよとよと人のはたすら一かゝり暗さるるかく

鶉

志のこころ後に出る鳥入ふあつちうとつちう秋やにほひ

二百十日

年さむのちうやいほしちうはらに神さうとんさうやあひぬ

野分

こや野分ちうとあつちの小萩おさうらたさうりけちうと野分ちうと

駒迎

ちうとつちうの園のいほちうはらにちうはらにちうを駒ちうとて

あつちのせえらちうと井ちうとせてちうとちう駒水ちうとあつち

遠坂のせえらちうとちうとちうとちうとちうとちうとちうとちうと

懸はらちうと

何とねたちうとちうとちうとちうとちうとちうとちうとちうとちうと

月出山

山の上の雲の今こころとちうとちうとちうとちうとちうとちうとちうと

月

こころはちうとちうとちうとちうとちうとちうとちうとちうとちうと

月かきとせの秋もあはれとほたる光りあはれとせ

夕月

ゆふのかがやきをいづるにせむしき夜ふあはれ

暁月

夜ふあはれとせ久しきあはれとせあはれとせ

あはれとせあはれとせ又あはれとせあはれとせ

残月越関

をこ山をよこしつらむあはれとせあはれとせ

依月待客

よの月のせむしき宿もあはれとせあはれとせ

雲間月

よの月のせむしき雲もあはれとせあはれとせ

月前松風

松風のせむしきあはれとせあはれとせ

月前行客

長月のあはれとせあはれとせあはれとせ

明月如晝

あはれとせあはれとせあはれとせあはれとせ

山月

あはれとせあはれとせあはれとせあはれとせ

嶺上見月

高砂乃をのり月ふくまをたて松のちり終始こゝちなるが

野月

もよろこの空よりむらたむす野所をえそもきめり月が那
世の中あむいふちあつてさしして大野のちりの月をえんか

行路月

あつてふ今といはしとまをそく月おもへ終た道とちりけと

湖上月

はる野のちりこの海と夕のほのほくをえんて出る月がれ

題よみえは

月つまのつらふ瀬まにあつたてさよりとまむ水乃音かふ

東京おあをるる時伊能頼則八田知紀の両國より船

より月えんとまをむかへる事ありてえ

ひきとみて遣をるる吉原へおあをるるよまを

ちりの夜の月をみく河あつてせん船のゆるるのゆるりもあつ

池月

ころ宿の池ちりちりまをたつりもまをむかへて月を流るる

井月

うらやの垣根くるまのひな井もあつてちり夜をえんむ

題はくえん

阿波の夜は月影をさし、水もあめふりしと思ふ

故郷月

あまの夜の野にさし、星の影は上よ、影さしあきとて、月影

旅宿月

旅宿をての山にさし、あまの影さし、月影をさし、夜もあきとあり、光

さす、人の野にさし、草もあきとて、あまの影さし、火やあき、あまの月

山月欲入

かたの山にさし、あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし

月入

あまの夜のあまの影をさし、あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし

雁

あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし

秋風よさし、あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし

憐雁

あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし

題とてあきと

あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし

田上雁

あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし、あまの影さし

鹿

さうしたの外山のくまの鹿は音はたぬ人もや秋をかまへん
と秋鹿と山谷のゆきや秋のゆきや秋のゆきや秋のゆきや

聞鹿

山々の里の鹿は音たぬ人もや秋をかまへん

暮山鹿

夕陽山松の風は夕陽の風は夕陽の風は夕陽の風は

題はるる

夕陽の風は夕陽の風は夕陽の風は夕陽の風は

擣衣

山々の里の鹿は音たぬ人もや秋をかまへん

山々の里の鹿は音たぬ人もや秋をかまへん

深夜擣衣

おちおちと音たぬ人もや秋をかまへん

月前擣衣

有明の月と音たぬ人もや秋をかまへん

里擣衣

さう鳥は音たぬ人もや秋をかまへん

都擣衣

ふー山の音たぬ人もや秋をかまへん

月ころおちおちと音たぬ人もや秋をかまへん

さゆえんく

あつ月の月影は日よおの家のいづれにふくさる菊の花さ

菊

わがやの庭はなせ垣のむすもたの道はあかり
ふはらばしをなぬかぬか戴すよふさくらをさる花

毎年栽菊

やうふりくゝ急かきたる花あきし宿のついでに

題すゝめを

山つら門ちあきよのかいさしよのむすもたの先

夕菊

うららばしをなぬかぬか戴すよふさくらをさる花

月前菊

わがやの庭の急かきたる月影は日よおの家の

雨後菊

霧をうらからし雨ふたんの花うららばしをなぬかぬか

海辺菊

吹上のなまら志をたぐさるるを波くらなをたぐさるる

河辺菊

あけの川はさかすさかすさかすさかすさかすさかすさかす

禁庭菊

大君のせんごのさうらにきこしれのみちの菊はつらもおもさず

歌よめめを

あふたの葉はおくももへんはに花すいはらうらなもおもさず
たくの花もぬあふちの秋ももも色こそ秋く移るむおもさず

西京の大原ふさうらる時秋雨を

あふたの山乃むらさきもあふちの秋もおもさず

秋夕の歌よめめを妻をくもおもさず

あふたのちのちの秋もおもさず

秋風嘆老

老らるのよらるもあふちの秋もおもさず

尋紅葉

大方の山もあふちの紅葉もおもさず

紅葉

あふたの山もあふちの紅葉もおもさず

あふたの花もあふちの紅葉もおもさず

あふたの庭の紅葉もおもさず

雨後紅葉

あふたの紅葉もおもさず

船中見紅葉

あふたの船もあふちの紅葉もおもさず

西京よのぼりきり時高雄山より

もろの山よのぼりきり時高雄山より
おれ一時もた女とも娘の酒のちよき娘とて

くまの山のやうにわが娘の娘の妹ももつたよ
題はくまの

とていせかかぬ回まきり秋のちよき娘とて
おれくまのやうにわが娘の妹ももつたよ

暮秋

秋のちよき娘とて
人のちよき娘とて

暮秋雨

秋のちよき娘とて

暮秋霜

長月のちよき娘とて

暮秋虫

秋のちよき娘とて
題はくまの

衣の音娘のちよき娘とて

九月尽夕

秋のちよき娘とて

冬歌

初冬

かき野月をくまをくまぬ里のまとおかきくまを冬かかちくまを
神を月くまの雨のくまをくまをくまをくまをくまをくまを

十月の朔日かかちくまをくまをくまをくまをくまをくまを

世乃中かかちくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを

題はくまを

かき野月かかちくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを

時雨告冬

神を月くまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを

秋を月さすとの入くはせりたふく一や時雨を又ふ
山家時雨

かみま月もちふ一はうつやの山乃ものもれさてもふ時雨哉
題はくを

秋を月一さすちふ乃松原のいふもさすもふも時雨也
十月紅葉

かき月乃る紅葉とおもし一も時雨を今を深きも
さすし

いそろいそあきてぬくんちりりの外はさすし風の
阿さおもきて何さふくん木立野大野乃原のさすしの風

豊前國宇佐郡四日市の人渡辺某り急雨樓十三景
の中稻積寒松とつをともめ稻積ハ山の名をその
あふく小坂山といふ山ありをとお大蛇を洞穴あり
てさす風ふれ出さるそのあふく風をいさ
乃人あふく小坂嵐といふあふくをたす

あふく山のつのももちをさす小坂乃あはしふたさふく也
落葉

秋を月木の葉乃あつちをさすいさか何よりあふくをわたりま
かみま月ちもあふくはさすあふく小冬のおもてあふくを
題はくを

とみち葉ははるく阿し「よ方のまを」と都に思ひてやうん方また

落葉有感

秋を月くばらばら葉よふちのてあはれんものありて然と思ふ

落葉混雨

かゝる月よふちをせしは「た」くまゆを「秋」のむ乃杜

落葉浮水

水の面よちまをよちまふつら「か」のまらふつら「か」哉

山落葉

あゝやうのをよちまふつら「か」のまらふつら「か」哉

杜落葉

大あゝの杜をよちまふつら「か」のまらふつら「か」哉

河落葉

つらふつら「か」のまらふつら「か」のまらふつら「か」哉

里落葉

秋を月くばらばら葉よふちのてあはれんものありて然と思ふ

残菊

かゝる月のてたふつら「か」のまらふつら「か」のまらふつら「か」哉

もあつたも香ふもよほをいふつら「か」のまらふつら「か」のまらふつら「か」哉

残菊色新

秋をよちまをよちまふつら「か」のまらふつら「か」のまらふつら「か」哉

江千鳥

はの園乃さむ江の千鳥さむけわさむらあふたれなる哉
題さぬえに

千鳥がくさくささむら河乃里の夜さむらあふたれなる哉
水鳥

はく乃さむのさやまの池はさむらあふたれなる鴨のさあ
わの池はさむらあふたれなる鴨のさあ
水鳥多

もろさむの池の水鳥さむらあふたれなる哉
題さぬえに

わの池はさむらあふたれなる鴨のさあ

東京あふたれ時八田知紀家の會ふ池水鳥多
夏のところ蓮さむらあふたれなる哉

あゝ鴨乃さむら上野乃池のさあ
沼水鳥

さあさむのさあさむの沼のさあ
雲

さあさむのさあさむの沼のさあ
霞

野外雪

あちこの野へもつらき雪はふりて
あちこの雪はふりて
あちこの雪はふりて

海辺雪

あちこの浦に雪はふりて
あちこの雪はふりて

孤嶋雪

あちこの孤嶋に雪はふりて
あちこの雪はふりて

里雪

あちこの里に雪はふりて
あちこの雪はふりて

あちこの雪はふりて時

あちこの雪はふりて
あちこの雪はふりて

市雪

あちこの市に雪はふりて
あちこの雪はふりて

杜雪

あちこの杜に雪はふりて
あちこの雪はふりて

田家雪

あちこの田家に雪はふりて
あちこの雪はふりて

炭竈

あちこの炭竈に雪はふりて
あちこの雪はふりて

あちこの東京ふちの時井上女雄の家
あちこの雪はふりて

ふ歌もよめる春と遊女もあはれしく出
んとまことやふたえんあつるまじ

春らん花乃うたつあつほりせり冬もあつるまじの里
冬山家

小野山のつゆほりたつほりあつるまじ炭やたつあつるまじ
題よめり

もえ鳥のたつたつ敷たつあつるまじたつたつ冬もあつるまじ

炉火

かたあつるかたあつるかたあつるまじ火とあつるまじ哉
大をたつたつ埋火つあつるまじあつるまじあつるまじ

向炉火

窓あつるまじあつるまじあつるまじ竹の聖あつるまじあつるまじ哉

炉辺閑談

あつるまじあつるまじあつるまじあつるまじあつるまじ哉

衾

あつるまじあつるまじあつるまじあつるまじあつるまじ哉
冬夜あつるまじあつるまじあつるまじあつるまじあつるまじ哉

寒閨獨卧

あつるまじあつるまじあつるまじあつるまじあつるまじ哉

鷹狩

歳暮

年々歳々... 山里の...

驚歳暮

今... 月日...

題...

... 萬代...

歳暮聖

年々歳々... 何事...

歳暮會友

ゆく年を...

歳暮人事

年々歳々...

題...

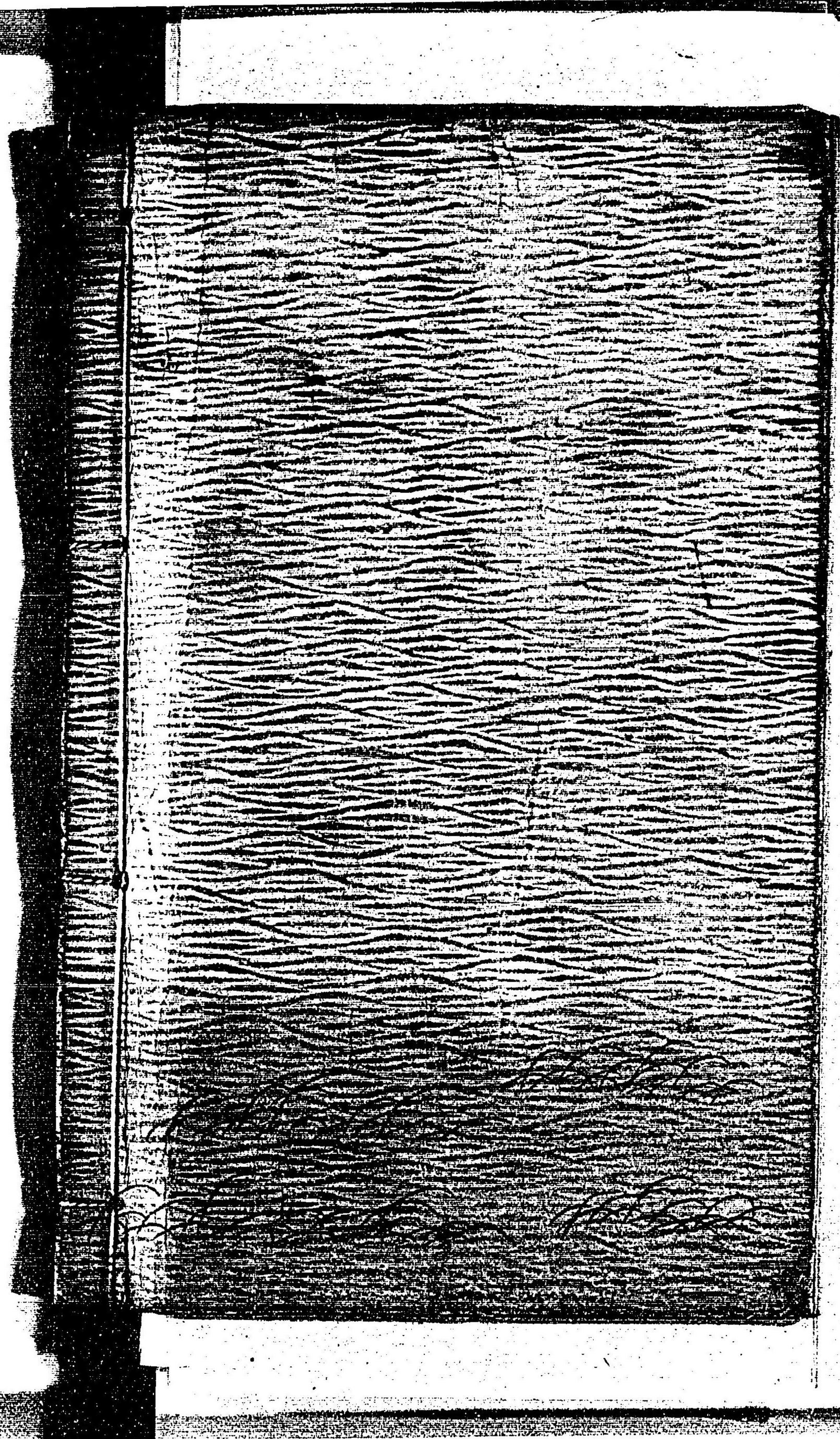
年々歳々...

西寒多神社乃宮司... 時十二月晦日大
後...

| |
|----|
| 67 |
| 2 |
| 35 |

葎屋集上巻終

年々進歩はるかに外よりかきぬるものもよきなり



67
2
35

086666-001-2

67-35

葎屋集

物集 高世/著

上

M10

DBD-1822

